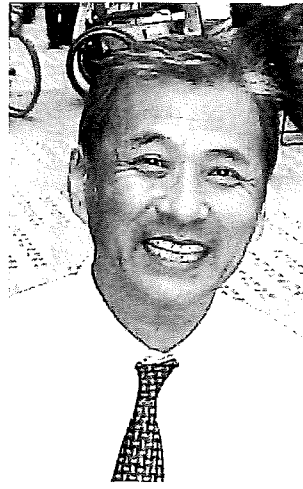


## 「ありがとう」の重さ



大阪府

玉木文憲

日常私と接点を持つ方々は、私をかわいそうな障害者だとは思っていないようです。たしかに車いすに乗っており、トイレも着替えも一人では満足にできないのですから、身体障害者であることは現実です。

しかし妻を中心としながらも、毎日を営む上で分担しあった家事はきちんとこなしますし、夫婦で経営する会社の仕事依頼も、障害者というエクスキューズなしに飛び込んできます。こうした表面的な事実を眺めますと、「玉木は障害者ではない」という評価に結びつくようです。事実「体が不自由

「ですので」と前置きして、日常のお役目に相対したことはありません。

このように贅沢ぜいたくはできないものの、家族全員が楽しい、前向きな毎日を送っているのですから、障害者だからといって、もう望むもの、泣きついてでも手に入れたいものはなにもないと言えます。

私は父親一人に育てられた、いわゆる父親っ子です。私が中学生のとき若い命を終わってしまった父でしたが、亡くなるまでの父親らしい姿を忘れることができません。私にとって、父は父親としての、私の手本であり、鑑かがみのようなものでした。

男の台所をあたかもロビンソンクルーソーのサバイバル生活のように楽しみ、休日は男同士で野山を駆け巡りました。年の離れた兄貴のような父が大好きでした。

ですからこの体に障害を負ってしまったとき、人知れず舌打ちをしたことがあります。

「困ったな。父親らしいことができない」。

障害との戦いは、父親らしさの欠如との戦いでした。成人した娘と腕を組んで、繁華街をおねだりの買い物に歩いたこともありませんし、車いすに乗るようになって生まれた息子は、親父の肩車も知らなければ、手をつないで歩いたことさえありません。

自転車を買ってあげても乗り方を教えてあげることができない。グローブを買っても、キャッチボールひとつできない。そのたびに父親としてのふがいなさを噛かみしめてきました。全身すり傷だらけ、血まみれになって自転車の練習をする息子が、可哀想かわいそうでなりませんでした。

ですから、娘とのデート、息子とのキャッチボールは、今でも私にとっての大きな課題として残っています。さらには、さぞ大きな苦勞をかけたであろう妻に報いることを忘れてはならないと思います。

さて私の病氣<sup>いしやく</sup>Ⅱ脊髄萎縮症は、三十歳になったばかりの秋に、音もなく訪れて来ました。最初はよくつまづく足に、運動不足を疑ったほどです。ですから次の休日にスウェット上下で身をかため、公園のまわりを走り始めたときに、ただならぬわが身の様子に寒氣を覚えたほどです。何度トライしても三歩目でころぶのです。何回試みても、三歩目が限界でした。

「おかしい…」

病院を訪れても、まだ脊髄を透視する技術さえなかった時代です。「なんともない」の医師の言葉の連続に、何度肩を落として病院を後にしたか知れません。

その後も症状は進行をとどめることはありませんでしたが、転勤先の大阪の病院で初めて、この病名が付けられました。ものの本で調べてみますと、原因も治療法もない特定疾患であるということでした。瞬間天を仰ぎ見るほどのショックを受けましたが、少年時代に父と重ねた苦勞が無駄にはなっていないませんでした。

自分の運命を呪うことなど考えず、症状への対処法と、明日の仕事の段取りなどに頭を切り替えてしまうような男でした。

「そのうち、なんとかなるサ」。

言葉にすれば、こうした考えの、表面的にはいかにも軽薄な男だったのですが、内心では「絶対になんとかしてみせる」と、歯をくいしばっていたものです。

しかし気持ちとはうらはらに、やがて杖が必要となり、補装具を作り、ついに車いすがないと、生活できないようになってしまいました。押しも押されぬ障害者の一丁上がりです。それでも仕事場では、車いすに乗って全国を駆け巡るマーケットとして、バリバリ仕事を続けていました。

ところが発病から一九九七年の年末から、急激に病気の症状が進行して倒れ、寝たきりになってしまったことがあります。

かかってきた電話の受話器を取り上げることができず、床に転がった受話器を拾い上げ、詫<sup>わ</sup>びを入れようとしたのですが、手も指も動かず、言葉も出ないのです。

受話器の向こうから「もしもし！」という得意先担当者の怒ったような声が聞こえていましたが、どうすることもできませんでした。

その後、どうやって家に帰ったのか、まったく憶えていません。気がついたときには、見慣れたわが家の天井が見えていました。

病気の直接の原因である胸椎以下の脊髄萎縮が、頸椎部分にまで進行してきたのです。頸椎といえ、もう小脳は目と鼻のさきです。立ち上がれないだけでなく、両手がしびれたように動かないまま、

話す言葉ももつれたままでした。

今まで病院や障害者団体の集会などで、重度の障害者に多く触れてきましたので、他人事だとは思えませんでした。

「ついに来たな」というのが私の感想です。ですからあまり驚きはしなかったのですが、人間らしい行動がまったくとれなくなってしまいました。妻はこんな私を見て、「この人、もうすぐ死ぬかも」と思ったそうです。

ぐい飲みに山盛り、十六種類の薬を一日に数回服用し、立てない、起き上がれない、手も動かない、言葉も話せない。真っ青な顔でヒゲをぼうぼうに伸ばし、垂れ流しですから、とても寝室の扉を開けておくことさえできません。北向きの暗く寒々しい部屋の中で、痛く苦しく、臭気に満ちた二か月半が過ぎ去りました。

ある朝、仕事に出かける支度を済ませた妻が私の枕元を訪れ、「ねえ、このまま寝たきりになっちゃうつもり？」と言い置いて出かけて行きました。

医師は「治せない」と言いますが、「ああそうですか」と、受け入れることはできません。大切な一度きりの人生なのですから、この思いは当然です。ですから医療だけでなく民間療法も健康食品も、さまざまなセラピストの治療も受けまくってきました。かけたお金も、かけた時間も、すべてが無駄なものだった結果として、死人のような生活をおくっている私には、妻に返す言葉がありませんで

した。

ついに言いたいことを遠慮なくもの申す妻の言葉によって、殺されるのかと思いましたが。正直申し上げて、このときほど妻を恨んだことはありません。「鬼」だと思いました。

私と妻は再婚同士です。わかりやすく言いますと、両方ともバツイチです。二人とも夢を抱いてしたはずの、最初の結婚に失敗しています。

私が妻にプロポーズしたとき、私の体にはすでに病魔が忍び寄っていました。同じ会社の店舗部門で素晴らしい営業成果をあげていた妻に、マーケットターの私は自分の仕事の将来ビジョンを、たびたび話していました。

知らぬ人が聞けば「大風呂敷」としかとれぬようなビジョンです。彼女は「きちんと包めれば、誰も大風呂敷だなんて言えないわ」と答えるような、大きな器の女性でした。二番目とはいえ、私の探していた伴侶はんりよはこの人以外にないと思えました。

私のプロポーズに、彼女は「あなたの描く人生絵画に、私を描き重ねてみたい」と応えてくれました。妻との結婚生活は、こうして始まっています。

私が寝たきりになってしまうことは、この妻との共有の人生ビジョンである「二人の人生絵画制作」から、私だけがおりてしまうことを意味します。結婚をはじめりとした人生の重要な約束を、私のせいで反故ほごにしてしまうことになりました。

「約束違反だけはしたらいけない」

死体同然の寝たきりとはいへ、元湘南ボーイの「ええかつこしい」が、つい顔を出してしまいました。まず妻を「鬼」とののしった自分を戒めました。そして気持ちが落ち着くのを待つて、ベッドから降りることを試みました。当然のことながら立ち上がることのできない私は、ベッドから降りたのではなく、ベッドから落ちました。

「さてどうしたものか」。

床にころがった私は、しばし天井を見上げながら考えました。

「なにはともあれ、この部屋から出よう」。

へビのように少しづつ這<sup>は</sup>つて、寝室からリビングに向かいました。

久々に訪れたリビングには、レースのカーテン越しに早春の明るい光が満ちていました。ベランダのプランターに植えられた水仙が、寒風の中で小さなつぼみをつけています。去年花を終えた水仙の球根でさえ、寒い冬の間に命をはぐくみ、こうした命のドラマを演じているのです。下向きだった私の気持ちが、少しだけ前を向きました。

「やっぱりこのまま死にたくない。元気になりたい」。

そう思いました。知らず知らずの間に、自分の命を閉じることまで考えていた自分に、このときはじめて気付きました。

「生きるんだ。生き続けて、必ず元気になるんだ」。

ふと書棚の上に目をやると、結婚したばかりの秋に、紅葉の下で妻と娘と一緒に撮った写真が目に入りました。

家族の支えなしに、今日まで生きてくることはできなかったはずですが。写真立ての向こう側からほほえみを投げかける妻と娘に、そつとささやいてみました。

「ありがとう」

なんだか両肩に背負っていた重たい荷物が、音を立てて崩れ落ちるような気がしました。この日私は、妻が帰ってくるまでベッドには戻らず、リビングで冬の日差しを浴びて過ごしました。

夕方仕事から戻った妻の喜びようはありませんでした。

「どうしたん？」

ヒゲぼうぼうで臭い私の体を抱きしめ、涙を流して喜ぶ妻に、「うん、君と大事な約束があったのを思い出したんだ」とひきつる笑顔で答えました。

言葉はたどたどしくても、二か月半ぶりにこぼした笑顔には、私自身が驚いてしまいました。

とはいえ、病気が消えてなくなったわけではありません。気持ちだけが「下から少し前を向いただけ」で、体にはなんの変化も起きていません。いや、起きていないはずでした。

なのに体の奥底からふつつつと湧きあがってくる生へのバイタリティーには、ものすごい迫力があ

りました。

その夜寢床についた私は、この一日に起きたできごとを振り返ってみました。どうしても昨日まで寝たきりだった自分が、今日一日を起きて過ごせたのか理解できなかったからです。

ことの顛末は妻のひとことに始まっているのですが、これはきっかけに過ぎません。少なくとも私は妻の言葉に、「鬼ー」と言い返しそうだったのです。

水仙の花でしょうか。いや、これとて私にとって良いモチベートではありませんでしたが、私の立ち上がる材料にはなっていないません。

水仙のつぼみがふくらんでいたベランダから、ビデオカメラをまわすように、部屋の中の様子を、頭の中に描いてみました。

「はっ！」と気付くものがありました。

家族の写真です。この家族の写真に向かって「ありがとう」と頭を垂れた自分を思い出しました。

「そうか。ありがとうだ」

「ありがとう」の言葉には不思議な力があると言われます。植木に「ありがとう」と言いながら水をやるとききれいな花を咲かせるといわれますし、安いワインも「ありがとう」と言いながら飲むと美味しくいただけると言います。

「ありがとう」の言葉、「ありがとう」の思いが、もしかしたら私の体のDNAのスイッチを切り

替えたのかも知れません。

不自由な体で寝床の中で読んだ、筑波大学名誉教授の村上和雄先生が書かれた本、「生命の暗号」に述べられている言葉を思い出しました。

「ノーベル賞受賞者も知的障害者も、そのDNA蘇生は1%も変わらない。眠っているDNAのスイッチをONに切り替えるのに、もつとも必要なのは感謝の思い、良い思いである」

村上先生の言葉は、私の記憶の片隅にあっただけのもので、自分が立ち上がるためにわざわざ取り出した理論ではありません。まさに後付けです。

しかし、こうしてわが体で起きている現実を説明するのに、欠かせない科学者の裏づけでした。

さらに数日経ったある日、この論理を駄目押しするようなできごとがありました。

毎週のように、広島から採れたての野菜を売りに来るおじさんの来訪でした。

この日もドアを開けると、「座らせてもらっていいかな」と言い、妻に私が起きられるかどうか尋ねていました。

幸い起きていましたので、車いすに乗って玄関まで行きますと、おじさんは立ち上がって私の手を包みこむようにしながら、私に尋ねました。

「とても辛いようだね」。

今まで経験したことのないような温かな言葉に、思わず心の警戒心をといてしまった私は、病気の

ことを話し始めました。

一旦立ち上がる<sup>いったん</sup>ことができたものの、こうして人前では愚痴を並べてしまうのが、人間の弱さかも知れません。

おじさんはときどき深くうなずきながら、私の話をさえぎることなく、出てくる愚痴をすべて聞いてくださいました。

「つらいことばかりだね。だけどなにか良いことはなかったかな？」

良いことと聞かれて、私はすっかり考え込んでしまいました。

「どんなに小さなことでもいいんだよ」。

「そういえば」と前置きした私は、前の週にお医者さんへ行くのに、車いすで通りかかった商店街の話をしました。

二月のどんより曇った寒い日だというのに、驚くことに、八百屋さんの野菜はみずみずしいくらいに青く、りんごや夏みかんの色が、いつになく輝いています。魚屋さんでは、魚が水しぶきをあげているようでした。店員さんの声も弾んでいました。いつもと違うなにかを感じて帰りました。

この話を聞き終えたおじさんの顔が、みるみる崩れ、眼鏡の奥の小さな目が「これ以上はない」というくらいに笑みを浮かべているのに気がきました。

おじさんは私の手をとり、固く握り締めて「あんたの病気は、もう通り過ぎてしまったようじゃ」

と言いました。「また来るよ」と言って帰っていったおじさんのことを「変な人だ」と思いました。

後日一通の手紙が届きました。細い筆で一枚の便箋に、「あなたに会えてよかった。ありがとう」と走り書きされ、「感謝」と彫られた朱も鮮やかな印鑑が押されていました。

おじさんが病気を治してくれたわけではないと思います。でも私の体は、この「ありがとう」を境に、薄皮を一枚一枚はぐようなスピードで、生命の息吹を取り戻していきました。まさに村上先生の理論通りです。

小さな前進がひとつあるたびに、私の口からは「ありがとう」の言葉がこぼれました。愚痴蒙昧（ぐちもうまい）の毎日だったことを思えば、天地がひっくり返ったような嬉しい変化です。

「ありがとう」と言える自分が愛らしく、「ありがとう」の言葉が快く感じられるようになりました。障害のあることも、体に不具合のあることも、客観的に見れば、決して嬉しいことではありません。

それが、このおじさんのおかげで、毎日元気に寝起きし、毎日感謝の気持ちで迎えられるようになったのですから、おじさんにも、私を温かく見守る家族にも、神か仏の姿を見るような思いがしました。

こうして一か月ほどたったある朝、ちょっとした変化がありました。家族に投げかけた「おはよう」の挨拶が、いつになく、ときれずスムーズに出たのです。妻が「あっ！」と言って、私の口を指差し

ました。思わず口を押さえた私にも、この変化はわかりました。

言葉を発するときの、あの不快なひきつった感じがまったくくないのです。照れ隠しに食卓の前に座り、テレビに見入るふりをしていましたが、どんなニュースが報じられていたかなど、まったく覚えていません。

現在私は全国組織のNPO副理事長として、家業の合い間を縫って障害者が在宅のまま就労できるように、制度の改正や障害者の就業訓練に走り回っています。

障害者の就労を阻む、社会の障害者に対する偏見は未だに根強いものがあります。障害のない方々に比べると、これは過ぎた注文だとは思いますが、私たち障害者は「下を向いて自分のことばかり考える」姿勢を改めるべきだと思います。自分のことばかり考えていない障害者でも、社会からはそう見られている現実がある以上、よりアグレッシブに前向きの姿勢をアピールする必要があります。

従来行政から提供されてきた福祉は、障害者の最低限の生活を保証するためのものであって、障害者の人生を広げる目的は持っていません。私たちはこうした従来型の福祉に慣れ親しみ過ぎたせいでしょうが、とかく「あれしてくれない」「これが不自由だ」といった受け身の発想で、ものごとを捉えがちです。

障害者福祉は私たちの生活を支えてくれるといった意味では、大変大きな意味合いを持っています。

福祉なくして、私たちの生活は成り立たないかも知れません。

ですから私はNPOの活動をする中でも、この制度に感謝を抱いた上で、障害者が思う存分働ける社会を作りたいと考えています。まずは障害者の考え方の根幹を改善するコミュニケーションから、すべての活動をプロデュースしています。

これはまさに自分自身が病床から立ち上がったときの村上先生理論に基づくものです。

「ありがとう」の言葉を口にできる人間は美しいと思います。こうした美しさをわが身につけることで、社会の障害者に対する偏見を、自分たちの手で解消していききたいものです。

私たち障害者が夢見ること。それは各々が不自由な体、不自由な生活を克服して働き、結婚、出産、育児といった、人間として当たり前前の生活ができる社会を作り上げることだと言って過言ではないでしょう。これが私に残されたただひとつの願いです。

日本の未来を担う若者たちのためにも、今障害を持つ当事者である大人の私たちが、勇躍立ち上がるべきではないかと思っています。

玉 木 文 憲

昭和二十四年生まれ 会社経営 大阪府大阪市在住

【受賞のことば】

NHK障害福祉賞は、一九九八年から挑戦を続けておりますので、今回の受賞を大変嬉しく受け止めています。

何度落選しても、応募テーマがそういくつもあるはずがありません。自身の障害に苦しむ日々をたどりながら整理してみても、今の私を支えている、もつとも大きなものに気付くことができませんでした。明日からも「ありがとう」という魔法の言葉の重さを、日々かみ締めながら、使命ある人生を歩んでまいります。

選 評

「体の奥底からふつつつと湧きあがってくる生へのバイタリテイ」が貫いている文章を読む私は圧倒されました。

人生に大きな影響を与えるものは、その人だけが感じるもの、見えるものがあると聞いていますが、玉木さんのひたむきな生き方は、村上和雄先生の著書「生命の暗号」や広島から野菜を売りに来るおじさんとの出会いにより、見事に前進、成熟されました。障害をもつ当事者としてNPO活動をされる姿に脱帽しました。

(江草安彦)